【ご案内】言語文化表象研究会

『メディアの中の社会思想・宗教・文化』をテーマに研究会を行います。
今回の研究会では、文化・文学・言語の三つの分野からのアプローチで研究テーマに沿った口頭発表の後、フロアとの意見交換を行います。
尚、本研究会は、2029 年度に出版予定の書籍の内容を検討することを目的としています。
本研究テーマにご興味のある方や今後ご寄稿を検討いただいている先生方はぜひご参加ください。

日　時：2023 年 9 月 13 日（土）13：00～17：00
場　所：京都外国語大学　453 教室

【発表 1 】13:10～13:40　（13:40～質疑応答）
発表者：辰巳遼
タイトル：「アメリカの信仰と感情 ― 宗教的表象をめぐって」
＜要旨＞
アメリカの宗教は、ナショナルアイデンティティはもちろん、現代のアメリカの市民感情を読み解く上で最も重要な要素である。歴史の原動力であることば/表象と宗教的感情の関係を再考し、アメリカの信仰がいかに歴史実践をもたらしたかを考えることは、ポストトゥルースやポストメディアが注目される今だからこそ必要である。例えばジョナサン・エドワーズの *The Religious Affection*(1746)やノア・ウェブスターの『ウェブスター辞典』(1828)などに見ることができるように、アメリカにおいて印刷やテレグラフといったメディアは感情を運ぶコミュニケーションを形成したが、その中心にあったのが宗教的な動機であることは広く知られている。
本発表では、アメリカの信仰の対象が何なのかを読み解くために、アメリカの宗教的な表象とそこに渦巻く感情の関係を考察していきたい。その上で大衆化された宗教的感情がいかにアメリカのメディアで表象され、実践を促したかを明らかにする。

【発表 2 】
14:10～14:40（14:40～質疑応答）
発表者：林姿穂
タイトル：「アメリカン・ルネサンス期の文学に描かれる宗教ツーリズムについて」
＜要旨＞
ホーソーンとメルヴィルは 教会をテーマにした短編小説を執筆し、その中で日曜礼拝に出席する信者や聖職者を覗き見する語り手を描きこんでいる。ホーソーンの“Sunday at Home”(1837)の語り手が、自宅の窓から教会の礼拝を覗き見するのと同様に、メルヴィル

の“The Two Temples”(1854)の語り手もまたこっそりと教会の通気孔に侵入し、不法ながらそこから礼拝を覗き見する。彼らは教会の信者と心を共にすることなく、部外者の視点で、信者と牧師の様子を観察しながら、皮肉交じりに礼拝について語るのである。両作家が生きた時代において、教会は豊かな人々が社交目的で集う場であるとともに、見る対象、すなわち観光の目的地になりつつあった 19 世紀中ごろまでには、教会に来る信者の信仰の深さや改心が かつてのように求められることはなくなり、信者たちは娯楽的な要素を求めて教会に集うようになっていたのである。ホーソーンとメルヴィルもこのような感覚を持っており、二人で一教会巡りを楽しんだこともあった。本発表では、“Sunday at Home”と“The Two Temples”の語り手が教会の日曜礼拝を外側 から覗いて観察するという共通点に着目しながら、ホーソーンとメルヴィルの教会観について論じていく。

【発表３】
15:10〜15:40 (15:40〜質疑応答)
発表者：衛藤圭一
タイトル:「社会思想と法助動詞 ― 政治・メディアにおける shall と must の社会的機能」
＜要旨＞
本研究会のテーマである社会思想は、社会や人々の行動のあり方に関する思考を含むため、必然的に「社会的義務」や「制度的規範」と関わりを持つ。英語において、これらの義務や規範はしばしば must や shall などの法助動詞によって表現される。したがって、社会思想が「社会における義務や規範」を扱う以上、それを伝える言語的手段としての法助動詞の義務的意味とは密接な関係にあると言える。
そこで本発表では shall や must に注目し、これらの法助動詞が担う社会的意味を語法研究の観点から考察する。とりわけ shall は、一般的な使用頻度の低下が指摘されている一方で、社会思想に関わる政治演説やメディアにおいては、規範的意味にとどまらず、約束や予言を示す際にも用いられていることから、依然として重要な機能を果たしていると考えられる。こうした点を踏まえて義務や規範を表す法助動詞の使用実態を分析し、その特性と社会思想との関係を論じたい。

16:00〜今後の研究会の予定について　　17:00 終了予定